

## 大原社会問題研究所五十年史

## III 本格的事業の展開から東京移転まで〔一九二三～三六年〕

## 研究所、大阪を去る

研究所は東京移転を記念し、あわせて大阪市民との訣別の意もふくめ、告別講演会を一二月一日午後六時半より朝日会館公演場において開催した。それは聴衆約一、六〇〇人を集めて盛会であったが、講演者は次のとおりである。

開会の辞	権田保之助
社会事業と社会政策	大林宗嗣
社会問題の観方としての個別観と全体観	河田嗣郎
社会問題の中心点	安部磯雄
都市生活と社会問題	大内兵衛
大大阪へ求むるもの	下村宏
閉会の辞	高野岩三郎

東京に先発した久留間、鈴木氏らは新事務所の増改築、荷物の受入れ準備に努め、大阪では高野、森戸、後藤氏らが家具什器、図書資料の発送を監督して多忙を極めた。こうしてこの年は暮れた。

翌一九三七(昭和一二)年一、二月は旧年にひきつづきもっぱら移転準備と退職所員の就職あつせんに費されたが、大林氏は同志社大学講師に、鷹津氏は大阪府社会課へ、それぞれ決定した。荷物の発送も二月上旬にはほとんど完了した。

二月一五日には研究所主催の感謝と告別の晩餐会が新大阪ホテルにおいて開かれた。大原氏はじめ、河田嗣郎、飯島幡治その他数氏が招待され、高野氏は矢崎千代二画伯の筆になる大原氏の肖像画を贈呈し、多年の援助を謝し、また大阪への告別の言葉をのべた。翌一六日には所の什器一切を府に引渡し、一八日には高野、森戸の諸氏が大原氏主催の送別会に列した。二七日には八万余冊の図書の引渡しも終った。大原社会問題研究所が一九一九年二月九日に創立されてより、まさに一八年目にして大阪の地を去るのである。高野氏はその感懐の一端を洩らしている―「所を離るるは何となく淋しき感あれども、亦同時に、多年の荷を下したる心持す。」(一九三七年二月二〇日附日誌)。

高野氏は三月八日上京し、ほぼ改築成った東京柏木の新しい研究所の門をくぐった。

法政大学大原社会問題研究所五十年史

発行 1970年11月

編・発行法政大学大原社会問題研究所

[前のページ](#) ← 法政大学大原社会問題研究所五十年史【目次】 → [次のページ](#)

研究活動・刊行物 OISR.ORG全文検索

法政大学大原社会問題研究所(<http://oisr.org>)